

# 現代スリランカにおける老人ホームとその近隣社会

平成 18 年度入学

派遣先国：スリランカ（スリランカ民主社会主義共和国）

中村 沙絵

キーワード：老い，老人介護，施設福祉，施設の社会化，南方上座仏教社会，積徳行為

## 対象とする問題の概要

2年前，スマトラ沖地震大津波をきっかけにスリランカを訪れた。そこで私は，家庭や健康の問題を抱えつつも，来世に向かって慈善や功徳を積みながら生活する老人たちに出会った。死を一切の終わりとする日本社会では，老人は暗黒の死に向かって生きつづける存在であり，介護にも積極的な意味が見出せないという状況がある。一方，輪廻転生の世界に住むスリランカの老人は，人生の最晩年に自ら意味を見出して生きており，それが介護の有り様にも影響しているように見えた。こうして私は，スリランカ固有の老いや老人介護のあり方に興味をもった。

しかし，スリランカの老人に関する研究は人口統計学の分野を除くと殆どなかった。隣国インドには研究蓄積があるが，その多くが近代化によって老人の地位は低下するという近代化理論を基盤にする。そのため，老いや老人介護の悲観的な側面が強調され，積極的な老いの姿や老人介護のあり方は視野の外におかれてきた。



男性用老人ホーム。男性（98）は元アーユルヴェーダの治療師。白い衣服で、一日中廊下で時間を過ごす

## 研究目的

この研究の目的は，南アジア地域における積極的な老いの姿や老人介護のあり方を見出すことだ。しかし，スリランカにおける老人研究の蓄積が非常に限られていることから，まずは基本的なサーベイが必要であると考えた。老人一般に関するサーベイは困難であるため，私は研究対象として老人ホームを選び，概括的な把握を行うことにした。スリランカにおける積極的な老いの姿や老人介護のあり方を明らかにすることを念頭に置きながらも，まずは概括的な把握のために，老人ホームの ①歴史的系譜，②社会的位置づけや地理的広がり，③類型や全般の特徴などを明らかにしようと考えた。2007年2月から2ヶ月間スリランカに滞在し，政府関連機関における老人ホーム台帳や関連資料の収集・NGO及び高等教育研究機関における聞き取り調査と文献調



菩提樹供養を行う女性たち。近隣の敬虔な優婆塞が主催しており，ホームのおばあさん方も毎週参加する

査・老人ホーム（20ヵ所）訪問・2施設での参与観察などを行った。

### フィールドワークから得られた知見について

スリランカの老人ホームの起源は、19世紀初頭のイギリス統治局による貧困高齢者の救済事業に遡る。そして、1920年代以降のキリスト教と仏教の対立や、仏教復興の文脈における社会事業運動の高まりのなかで設立が進んでいる。施設の普及を担ったのは国家でなく、宗教・社会事業家ら、そして彼らの呼びかけのもと土地や施設を提供した新興富裕層である。1960年代に政府主導でホームの建設が始まっているが、予算不足により3施設に留まっており、殆どが慈善団体により運営されて今に至っている。

現在は都市部だけでなく農村にも建設され、その数およそ200以上、高齢者人口の1%弱が住むと推定される。入居背景は一概には言えないが、子どもの海外出稼ぎによる介護者の不在（有料ホーム）や、配偶者や子どもの不在、子どもの貧困（無料ホーム）などの理由が多い。全体の7割程度をしめる無料ホームは、政府からの助成を受ける機会はあるが、安定的な収入はない。ホームの近隣地域からの援助なしには、その運営は非常に困難である。



ホームステイ先の家族とホームへの布施に参加

そこで、どこの老人ホームでも布施行為を行う近隣住民のネットワークがある。布施は、南方上座仏教社会において輪廻世界における来世でのより善き生のための行為（積徳行為）だ。ホームの近隣に住む人々は、頻繁に食事や資金、サービスなどを提供しにホームを訪れ、功德を積む。これに対して、入居している老人も、訪問した住民らに祈りをささげ、徳を転送し功德を積む。老人たちは、日常生活においても宗教的活動に長い時間を割いており、施設内や近隣には宗教的設備が整っていることが多い。

わかったことは以下の二点だ。まず、スリランカにある多くの老人ホームは、地域との関係性を構築することにより成立し存続してきたこと。さらに、現在この関係性は、ホームに住む老人と介護に関わる住民双方の、積徳行為を通じた交流によって維持されているということである。



昼食時。布施のあと、仏教とカトリックのお祈りが交互に行われる

### 今後の展開・反省点

老人ホームに関する先行研究（南アジアにおける社会学・人類学的研究は包括的なものが出ていない）からは、米国を中心とする欧米諸国において、脱施設運動の流れに沿った老人ホーム研究が盛んになされてきたことが明らかになった。しかし、これらの研究は「ホームの地域社会からの断絶」を前提としており、老人介護の問題を、地域における介護か、施設への隔離による介護かの、2元論にしばってきた側面が否めない。

他方、スリランカの老人ホームは、地域社会との関係性を構築することによって歴史的に成立し、また現在においても存続している。スリランカにおいては、積徳行為を介した老人と地域住民との間の相互の結びつきが、非常に強いのだ。今後の研究では、老人ホームに焦点を当てながらも、それを閉鎖空間として分析するのではなく、老いと介護における積徳行為によって歴史的に構築されてきた「開放空間」として研究していきたいと考えている。



自由時には本を読む方が多い。仏陀像の前で経典を読む女性



ムスリムのホームは全国に二箇所と少ないが、需要が高く施設の拡大工事が行われていた



ホームを建てたおじいさんの葬式では、親族・知り合いがホームに集まり、昼食(布施)がまかなわれた



近所の子どもたちが、学校帰りに老人ホームをおとずれる。この日は運動会だった。余興が収まらない様子